

メリッサ・マコーミック Melissa McCormick  
 ハーバード大学東洋学部・美術史学部教授。著書に「源氏の間を覗く—白描源氏物語絵巻と女房の視座」『描かれた源氏物語』（翰林書房、二〇〇六年）、*Toasa Misunobu and the Small Scroll in Medieval Japan* (University of Washington Press, 2009) など。

アメリカの日本美術史研究者メリッサ・マコーミック氏は中世の絵巻、特に『新蔵人』絵巻と同じ白描小絵を専門にご研究です。本書監修の阿部泰郎氏を助言者に迎え、マコーミック氏に美術史の観点から『新蔵人』絵巻についてお話を伺いました。

### 一 白描小絵と女性の視点

——『新蔵人』絵巻は「白描小絵」と呼ばれる作品群に含まれます。マコーミックさんは、『新蔵人』絵巻を白描小絵の作品群の中にどのように位置づけていらっしやるでしょうか。他の作品と比べた場合の独自性、また共通性は何かでしょうか。

マコーミック：最初に中世の白描小型絵巻の重要性について、話をさせてください。『新蔵人』絵巻は、中世後期女性文学のミッシング・リンクのように捉えられている、多くの白描小絵のひとつです。いまだに、鎌倉後期と江戸期の間には、女性による文化的産物で重要なものは何一つなかったとよく言われます。言い換えれば、平安・鎌倉初期に

女性たちの創作がピークに達した後——それは、当時の世界のどこよりも進んだ女性たちの創作の事例です——およそ三百年間の空白があったと言われているのです。様々な社会的な要因が、文化領域における女性の役割を縮小させたことは事実です。その例として、后妃やその家族によって後援される女性中心の文化サロンが消滅したこと、連歌や和歌の会において女性が不在となったことまでが挙げられます。しかし、女性たちはその後も引き続き十分に教育を受けて古典作品の数々に精通し、宮内でも、また公家や武家でも、重要な役割を果たしていました。現在、この時期の女性の作品はごくわずかし知られていませんが、これほどの長きにわたって女性が創作をしなかつたと推測することは、賢明ではないように思われます。

一つの可能性として考えられるのは、女性たちが文を書いたり絵を描いたりしていたとしても、それが私的で匿名のものであり、埋もれてしまったということです。このような現象は、日本に特有のものではありません。むしろ、世界中の様々な歴史の中で、女性の作品は出版されたり広く知られたりせず、非公式に見られていました。現代においてこれらを見つけ出し、研究することは、女性史への多大な貢献となり、ジェンダーや性の差がテキストとイメージに表裏されるのかという問題に、新知見をもたらすこととなるでしょう。中世の白描小型絵巻や一部の彩色絵巻は、多くの場合、絵を描くことを職業としていない女性でも、自分で作ることでできる形式でした。そのような女性たちは、例えば、高価な顔料や多量の金泥は所有していなかったでしょう。しかし、筆、墨、そして小絵を作るために必要なくらいの紙は持っていたでしょうし、自分の物であれば、人の物であれば、物語の写本を見て写し、新しい創作への意欲をかきたてていたでしょう。

もし一五、六世紀の女性たちが自己を表現したいと思った場合、どのような形式の作品であれば創作が可能だったのでしょうか。公的性格を持つ作品の形式を使えなかった女性たちにとって、白描絵巻は、まさにふさわしい形式だったと思います。私は『うたたね草紙絵巻』の複数の伝本を比較した時、このことに初めて気づきました。比較したのは、男性の著名な宮廷絵師（絵所預）、土佐光信（？—一五二頃）の手で作られた彩色の小絵と、これと同じ内容を持つ白描の小絵二本です。白描の小絵二本の絵には、一九世紀フランス印象派の女性画家によって描かれた絵に見られる特徴と、ほぼ同じ傾向が見られることに驚きました。例えば印象派の女性画家たちは、自分が実際に住んでいる空間や、一緒に働いていた女性達を画題として描きました。それと同じ傾向が、白描の小絵には見られたのです。最も興味深かったのは、どのような構図の中に女性をどう配置するか、どのような角度をつけて女性を描くかなどのこ

とが、白描繪巻の場面と著しい共通点を持っていた点です。

白描の『うたたね草紙』では、土佐光信本に比べ、絵の構成が大きく変えられ、女性の空間が加えられました。つまり二つの場面を追加し、女性の居室を広々と描き、そこに光信本には描かれない多くの女性たちを登場させています。これらの女性たちは、繪巻の観者が見る対象として加えられたものではありません。彼女たちは、女主人公の物語を協力して奏でる女房たちとして加えられ、女性たちの場を生き生きと表現する要素となっています。そして白描繪巻の方には、何よりも大きな特徴として、光信本には無い画中詞が追加されています。画中詞が加えられることにより、位の高い女房にも低い女房にも名前が与えられ、過去の文学作品のことなどについて話し合う声加わりました。その声の内容は、この繪巻自体が女性の手になることを示唆するような言説となっています。あたかも、沈黙させられた過去の女性たちが急に声を与えられたかのようにでした。これらの特徴はこの例に限られるわけではなく、白描繪巻に多く現れるものです。白描繪巻全般に特徴的なのは、女性の登場人物（女主人公、女房たち、乳母）が強調され、母娘といった女性の血統が重視されること、詞書にはない女性登場人物の台詞が画中詞として加えられること、そして出産、妊娠、家事などの様子が細部まで注意を払って描かれることです。人によっては、中世の白描小絵は、いわゆる「ベクデル・テスト」に合格すると言いかもしれません。

『新蔵人』繪巻はしたがって、この時期に女性の視点から生み出された数多くの作品の一つであると言えます。しかし他の作品とは異なる点があります。それは、描かれた女性たちの会話の内容が、文学上の事象や家庭内の関心事だけではないということです。繪巻の最終場面の画中詞には、彼女たちがジェンダー、性差そして表象の問題について、思索している様子が書かれています。そして、ジェンダーバイアスのかかった仏教的世界観の中にある女性の立場を考えると、この点において、他どの白描繪巻よりも、『新蔵人』繪巻は遙かに先を行っているといえるのです。

## 二 女性筆者

——『新蔵人』繪巻の片方の伝本には、後柏原院卿内侍筆という伝承が付いています。マコーミックさんのご研究にもあるように、後土御門院、後柏原院そして三条西実隆（二四五五—一五三七）の周辺では盛んに小絵が作られ、女性の伝承筆者として、後土御門院勾当内侍、後柏原院卿内侍、一位の局といった多くの名前が見られます。室町期に

における女性作家たちの物語制作の場についてはどうお考えでしょうか。

マコーミック・女性が物語を書いたという証拠はほんのわずかしかありませんが、女性が物語の写本を作ったり他の文章を写したという言及は、いくらかあります。新たな物語を創作するにあたっては、参考とするため、あるいは先行作品として作中で引用するために、既存の物語の写本を作っていくという作業が必要です。したがって、女性が写本を作っていたという事実は、女性が活発に創作活動を行っていたことを推測させる重要な手がかりになります。そのような女性——「女性作家」と呼ぶにふさわしいでしょう——が活動する場としては、依然として宮廷がありました。また天皇家や貴族に仕える女性たちや、剃髪して尼寺に暮らした尼たち、そして、京都や他の土地に暮らした上流武

家の教養ある女性たちも、創作活動をしてきたと想定されます。女性によって作られた作品やその活動の痕跡がより多く見出され、室町期の女性画家や作家に光が当てられることが期待されますが、最近では、一五二三年に作られた三巻の彩色繪巻、『しぐれ』が紹介されました。この繪巻の奥書には、「永正第十（年）八月十七日、之を書く。行年二十八歳、拙女」と記されていて、女性によって作られたことが分かります。この作品は、一六世紀の女性画家や作家にどのような才能があったのかを示す重要な証拠となります。

女性の人生に最低限の関心しか払わない男性が書く日記などには、女性たちの創作活動や作品については記されていません。男性たちの記録からは抹消された女性たちの活動を蘇らせることは、歴史的に重要なことなのです。女性の筆者が作ったという伝承が付いている作品は少なからずあります。しかし、そのように筆者名として名の出てくる女性たちについて研究をさらに進め、現存する白描繪巻と照らし合わせて考えていくことが大切です。というのも、『しぐれ』のように確かな奥書のある場合とは異なり、筆者伝承は多くの場合、後世の鑑定家による鑑定書や箱書きの形で現れるからです。白描小絵に女性の筆者伝承が付くことは、白描小絵がジェンダー上は女性として規定されていることを示唆していて興味深く思いますし、信頼できる情報源に基づいている場合もあるでしょう。しかし、著名な画家の名前をまるでブランドのように繰り返して使用したことで、特定の作品に対して、

——女性の名前は、鑑定が行われた時代には埋もれていたわけではなく、有効なブランドと考えられ、使用されていたのですね。

マコーミック・そうですね。しかし、我々は鑑定という行為の過程と意味についてもっと掘り下げ、鑑定が繪巻に価値

を付与することの重要性を考えなければなりません。天皇の周辺にいた女性の名前であれば間違いなく、たとえ小さな絵巻でも、天皇家の秘藏品としての由緒を与えます。それにより作品の文化的、歴史的そして金銭的価値を増加させます。そのような女性たちは、確かに白描小絵を作ったでしょう。しかし、ある作品に瓜二つの写本が複数存在する場合もあります。それらの写本は、そこまで上位ではない女性たちによって作られたのではないのでしょうか。

——白描絵巻の多くが女性によって描かれていたという点についてお尋ねします。特に『新蔵人』絵巻は、絵画的な、そして本文的な視点から見て、女性の手になる可能性があると、どうして言えるのでしょうか。

マコーミック：それは重要な問題ですね。ほとんどの場合、女性がこれらの絵巻を作ったと断定することはできません。生物学的には男性である人が、女性の視点で作品を作る可能性はあります。このように考えることは、生物学的本質主義に陥る危険を避けるために重要です。我々は、女性が単に生物学的に女性であるというだけで特定の 방법으로作品を作ったと主張することは、避けなければいけません。そうではなく、女性の目、意識、そして声を作品の中心に置く特定の絵巻は、「女性の視点(feminine subject position)」を採用している、ということであり、それは、生物学上の男性でも選ぶことのできる視点なのです。性をジェンダーから分離して考えることは、芸術作品の議論においても重要です。言い換えれば、誰であれ、生物学上の性にかかわらず、社会的に構築されたジェンダー・アイデンティティで振る舞うことはできます。例えば『土佐日記』は、修辭上の目的によって男性作家が女性の身になって書いた例として、よく挙げられますね。ですから、室町期の白描絵巻についても、「女性」の身になって男性が作ったということは、理論的には可能なのです。

しかしながら、ジェンダーというものが社会化を通して刻まれることを考えると、男性が女性の視点から作品を作る場合と、女性のジェンダーを生きてきた人が作品を作った場合とでは、作品の様相が異なることが想定されます。もちろん、現在議論しているような女性の視点による白描絵巻を男性が作ることも、理論的にはできたかもしれません。男性が女主人公の心に入り込み、乳母や女房の世界に身を浸して、女性の生活の詳細を描き込んだという可能性はあります。

理論上は、男性もそれを想像することができたでしょうし、登場人物たちに共感することもできたでしょう。また、手間を掛けて女性登場人物すべての名前を描き込んだり、室内の場面を多くしたり、室町期の宮廷女性特有の言葉遣い(女房詞)を想起させる会話を作り出したりすることは可能です。芸術作品の制作事情はすべて異なっているため、

個別に分析されなければなりません。しかし白描絵巻には、お歯黒道具のこまごまとした様子や、陣痛や出産の場面での他の中世絵画には描かれないようなモチーフ——例えば、陣痛の痛みを和らげると言われている象徴的な人形や犬の形代、あるいは湯を沸かしたり、出産後の薬を準備したりする女房の姿など——が描き込まれています。中世に男として社会化された男性が、これほど緻密に詳しく女性たちの生活を描くことができたとも考えることも、男性登場人物を排除して絵巻を作ったと考えることも、困難なものではないでしょうか。

いづれにせよ、『新蔵人』絵巻の絵と言葉の内容は、女性の視点を取っています。それは、この絵巻が若い女性にとつての関心事——自分たちにとって何が重要で、人生にどのような選択肢が用意されているのか——を前面に押し出して語っていることから分かります。これを描いたのが誰であっても、その人は、女性が抱える問題にとっても関心を持っていました。中世絵巻について通常は、絵を注文する人と見る人は、絵を描く人とは別だと考えますが、白描絵巻については、その想定は崩れます。佐野みどり氏が指摘するように、「白描という画法に内在する未完成性や私的・即興的性格」によって、白描の絵は女性にとつて「破格のモチーフや個性的な表現の復権の場」となります。

——それでは、少し話が逸れますが、女訓についてもお聞かせください。男性が女性のために女訓を書いた可能性はどうでしょうか。

マコーミック：それは大事な論点ですね。江口さんが以前に指摘したように、『新蔵人』絵巻や他の多くの作り物語は、教育的な作品としての意味を残していますが、室町期までにはかなり娯楽的なものにもなっていました。したがって例えば、男性が自分の娘のために白描絵巻を作り、娘がそれを写し、楽しみ、そこから学んだということも想像できます。これは比較をするのにとっても興味深い素材であり、このような女訓というジャンルがあつたことを考える必要があります。これは男性の視点から書かれた女訓は、女性の視点から書かれたものとは間違いなく異なるはずです。また女訓のように思える様相があつても、女性のジェンダーを帯びる物語もあります。一つの例として、室町時代の白描小絵の『藤の衣物語絵巻』の一場面が思い浮かびます。この場面は女性に対して、妊娠の身体的徴候をどう読み取るかを端的に教えています。女主人公の描写を通じて、絵巻の詞と絵は、黒くなった乳首が妊娠を表すことを見せえています。絵の中では、まさに、若い女性が自分の乳房の変化を確かめています。社会的な慣例と照らし合わせれば、これは、父と娘の間でというよりは、女性たちの間で共有された知識に基づいていると思われるか。

——男性的な女訓の文脈で、男性筆者が『新蔵人』絵巻を描いた可能性についてはどうお考えになりますか。



図1 『白描源氏物語絵巻』 パークコレクション蔵



図2 『阿字義絵』 藤田美術館蔵  
 (小松茂美編『続日本の絵巻7 阿字義絵 華  
 蔵五十五絵巻 法華経絵巻』中央公論社より)

マコーミック・『阿字義絵』については、成原有貴氏の研究があります。成原さんは、その女性の頭部が意図的に青く彩色され、髪の手跡を見せること、そして、長い髪の女性像を美とする当時の意識からすれば、その姿には女性らしさの対極の意味があること、女性であることに対する否定の意味までが含まれているであろうことを指摘しています。近世以前の絵においては、尼の女性性は視覚的に、頭巾を被ることや、頭髪のない頭を隠すことによって表現されてきました。

女性の姿の細かな点に対しても、大きな関心を寄せていたことが分かります。「新蔵人」絵巻末尾の尼寺のイメージと相まって、このことは、白描絵巻が、室町期の実際に剃髪した女性たちと深いつながりを有していたことを示唆しています。

この絵巻の画中詞の中で、尼たちが剃髪した頭の様子や、女性としての外見について議論しているのも、大変興味深いことです。姉の尼が妹の尼に、「頭を布で覆いなさい」と忠告したりしています。他の絵画における尼の表象と比較してみると、これらの言葉は、描かれた場面に対するメタ注釈のように見えます。作者は、尼たちの髪

のないむきだしの頭を意識的に描いているようです。阿部：このことは、『新蔵人』絵巻において最も重要な、最後の論点と発言とに繋がっているでしょう。画中詞の中で明確になることですが、この女性たちにとって、仏教的概念において、差異を越境することは建前にしか過ぎないのです。彼女たちはなお外見の差異に囚われていて、絵画もまたそうなのです。頭髪のない女性を描くことにおける負の側面の問題に戻れば、一つの例外は、藤田美術館蔵『阿字義絵』です。これは、成仏した姿の尼を正面から描いています(図2)。

マコーミック：もし男性によって『新蔵人』絵巻が女訓として作られたのだとしたら、この物語の登場人物たちに与えられている自由は、どのように捉えられるのでしょうか。考えてみれば面白い視点です。「新蔵人」絵巻を、父がその娘に好きなようにさせた場合に何が起るかを書いた、一種の訓話として読むこともできるかもしれません。その場合は、読むのが楽しい作品となります。一方で、この絵巻がどのように画中詞の世界に新しい考えを展開させているのか、そして、反抗的な娘を登場させ、どのように権威に対して疑問を出そうとさえしているのかを考えるのも、面白いことです。「新蔵人」絵巻の最後の場面は、女性の視点を雄弁に物語っています。

### 三 尼寺と描かれた女性性の空間

マコーミック：この絵巻では、女性に自由が与えられています。それは、絵の中に女性たちの空間があることや、最終場面(86・87頁)の描写から分かります。また、この絵巻では、仏教思想において女性が救済されるのか、という問題について、独自の複雑で洗練された見解を見せています。この絵巻の最終場面には、頭を完全に剃った状態(完全剃髪)の女性が描かれています。このような女性の姿は非常に珍しく、あまり目にすることはありません。女性がこのような描かれているのを、どのような人が見たいと思うのでしょうか。どのような人が若い女性読者に、このような生き方を見せたいと思うのでしょうか。このようなことを考えるのもまた面白いことです。

阿部：仏教説話や仏教的絵画では、迫害されたり破戒したりという否定的なイメージの場合に、尼の姿を、頭が覆われていない形で描きますね。そうではない宮廷女性の出家姿は、肩のあたりで髪を切り揃えた状態(尼そぎ)で描くというように、明確な区別が存在します。もちろん、物語絵とは同列には扱えませんが。

マコーミック：中世絵画では多くの場合、剃髪した尼たちは、頭を布で覆って描かれます。そのため、これほど多くの完全剃髪姿の女性を最終場面で見るのは、衝撃的と言えます。まるで読者が、通常は近づけないような私的空間に招き入れられたかのようです。「新蔵人」絵巻以外の白描絵巻で尼たちがどのように表現されているのか、それも興味深い問題です。例えば、『白描源氏物語絵巻』の断簡、「若菜下」の場面の明石の尼君を見ると、単純に髪を短くした尼そぎであるだけではなく、彼女の頭の頂には、小さい円形の白抜きが見られます(図1)。この描き方は、白描絵巻以外には見えません。これは剃髪を表しているようです。このことから、白描絵巻というジャンルが、尼になった

た。女性にまったく頭髪がないことが露わにされる場合は稀であり、頭髪のないイメージは、女性が男性に変化して成仏するという「変成男子」の概念と結び付きます。江口さんが指摘したように、頭を完全に剃ることは、中世においては本質的には男性に変わることを意味し、「僧と為る」と言われました<sup>1)</sup>。一方、視覚表象の歴史からすれば、頭巾を被せて表現することが、女性に変わることを象徴的に意味しました。したがって、『新蔵人』絵巻において、妹の尼が姉の尼に、頭を覆うように言われたことは、とても皮肉めいているのです。彼女は、あれほどのことを経験した後で、もう一度最初から女性をやり直すように求められているのです。おかしなことですね。

『新蔵人』絵巻が、女性を中心に描く他の白描(そして彩色)の絵巻と異なる点は、その尼寺における最終場面です。たとえ絵巻や物語が、冒険的で勇敢な女主人公や乳母、あるいは男性中心の伝統的な筋書きをひっくり返すような人物たちを登場させたとしても、大半の物語は、異性愛による規範的な結婚で幕を閉じます。それらは、ビクトリア朝の英文学の研究者たちが「マリッジ・プロット」と呼ぶものと同じです。つまり、どれほど女の主人公が強くて型破りであっても、彼女の物語は、結婚か死によって終わるのです。しかし『新蔵人』絵巻は、結婚で終わるそのような筋書きに代わる結末を見せている点で、大変魅力的です。すなわちこの絵巻は、女性が主役となる最たる場と言える場所、つまり尼寺で、女性たちが交流しているところで終わります。この場面は、中世絵画では、尼寺の内部を見せられる唯一のものかもしれません。この画中詞は複雑でニュアンスに富んでいて、喜劇的であると同時に深い考えを示しています。この最終場面は、既成概念を覆すような革新的な場面です。そのために、そのような表現行為をカモフラージュするために、ユーモアを以て繊細に表現する必要が生じたのではないのでしょうか。この場面のユーモアは、ここで重大なことが起こっていることを示す証拠であると思えますことができるでしょう。

#### 四 変成女子になりたる心地

——『新蔵人』絵巻の主人公は、男性として世の中を生きたいと言います。この作品は、トランスジェンダーの人物についての物語だと言っても差し支えないでしょうか。

マコーミック:この絵巻の主人公である末娘の三君は、自分の性格が男性・女性という因習的なジェンダー役割には合っていないと思っておりますし、また彼女は、男性と女性、両方の性格を持っていて、両者の間を行ったり来たりしてい

ます。そういう意味では、トランスジェンダーであると言えるでしょう。このことを説明するのにふさわしい重要な場面は、男性として行動したいという末娘の欲求が最初に紹介される第一段です。

言葉による説明に加えて、絵が、彼女がどういう人物であるかを見せています。彼女は姉妹の中でただ一人、父を正面から見、父に面と向かって物を言います。これは、尋常なことではありません。というのも、女性であれば恥ずかしげで控えめな態度を取るのが理想とされていて、この態度はそれとは相反しているためです。また、彼女はここで、仏教への帰依の念の深い長女と対比されています。長女は三人姉妹が作る三角形の——まるで釈迦と観音・勢至菩薩(三尊)を描くようです(18・19頁)——配置の中心かつ上位に座り、瞑想しているかのような形で、内側を向いているように見えます。また、宮廷に入るようになってくる次女は、読者に背を向けています。それは、その役柄にふさわしい表現であると言えます。次女が、宮廷で家族に恥をかかせたりはしない人物であることは明かで、彼女は注意深く控えめです。立場をわきまえている少女です。末娘はしたがって、男性として装わずとも、男性ジェンダーの方が適しているその性格を露呈させています。この絵は、彼女には女性のジェンダー役割よりも男性のジェンダー役割の方が、本質的に心地よくふさわしいということを視覚的に示しているのです。

——三君には、女性的な性格も見えます。第七段では、天皇と一緒にいる次女に「羨まし」と感じ、彼の子供を産みたいと言いますが、この点は矛盾しないでしょうか。

マコーミック:この作品がトランスジェンダーの物語であるかどうかの議論を続けると、第七段に見える彼女の子供を産みたいという欲求は、必ずしも彼女のトランスジェンダーとしてのアイデンティティとは矛盾しません<sup>2)</sup>。一つの理由は、トランスジェンダーというものの自体の性格に、そもそも幅があるからです。そしてやはり、我々が絵で見ると、画中詞で読むものの間に、対立的関係があるからです。読み手側はそのために違和感を覚えますが、その違和感が重要なのです。つまり、文字で書かれた考えとは一致しない絵を見せることで、社会的な規範を崩そうとしているのです。言い換えれば、読者は絵では男性を目にしますが、文字からは女性の思考を読みとります。そのような表現が重要なのです。

——現下、性がジェンダーからは切り離されていると考えさせる新しい可能性を生むのですか。

マコーミック:最終場面に見える「変成女子」という言葉については、どのようにお考えですか。

と使われてきたため、女性に日常的な罪業感を植え付けました。そのために、私は過去にこの場面の「変成女子」という言葉が肯定的に使われていると考えたことがありました<sup>15)</sup>。言い換えれば、このような言い回しさえ作ってしまえば自由さが、私にとってあまりにも特別で遅く思えたために、肯定的にしか解釈できなかったのです。しかし私は、物語の文脈の中では、それが登場人物のある種の憤りを表現しているという江口さんにも同意します<sup>14)</sup>。イメージと本文は相まってこの言い回しを解釈する可能性の幅を提示していて、否定、肯定両方の意味を含んでいるとするのも可能かもしれないと考えています。

阿部：「変成女子」という言葉自体は、肯定だけでも否定だけでもなく、どちらの意味も含まれているようですね。ただここで考えなければいけないのは、この言葉は画中詞にしか現れないということです。これは、他の尼たちによる批判への反論として、画中詞の中で生じた言い回しだからこそ意味があるのではないのでしょうか。

マコーミック：今阿部さんが提起した画中詞に関する興味深い問題が、この場面の解釈とどう繋がるのかについて発言させてください。第十六段はとても簡略に描かれた絵ですが、遠景に山を描き込んでいる所を見てください(86-87頁)。墨で描かれているだけなのですが、山麓に渦を巻いているものは、紫雲であることを見せる形となっています。紫雲は中世絵画では聖域や場合によっては彼岸、浄土までも表象するために使われています。この種の、往生の記号となっているイメージは、座主の宮の弟子になり、夜昼念仏を行い往生したと詞書に書かれている新蔵人の息子、男宮の往生を暗示しているのかもしれない。しかし同時に、詞書は、姉妹が成仏し幸福に救済される結末となることを予告しています。そのため、あの世を見せているかのような山と、尼寺の尼たちが並べて描かれることで、彼女たちの往生がほのめかされてもいるのではないのでしょうか。絵は修行と往生の関係を示唆しています。あるいは、亀井若菜氏が『信貴山縁起絵巻』の尼について論じたように、女性がすでに成仏にまで至ったことさえ、ほのめかしているのかもしれない<sup>15)</sup>。

いずれにせよ、このイメージは我々に、これらの尼姿のままの女性たちを、成仏や往生と関連づけて見ることを促します。一方、完全剃髪の頭の尼たちは、僧たちに似ています。最後の画中詞は、絵という表象の中で変成男子がどう描かれるのかという問題をも提起します。女性による変成男子概念の受容についての研究は、女性には必ずしもこの用語や男性への変化の詳細を、文字通りの意味で受け入れたわけではなかったということを明らかにしました<sup>16)</sup>。『新

蔵人』絵巻は、この変成男子の概念へのささやかな抵抗の歴史の、大事な一部です。変成男子の思想をあらさまに打ち壊そうとするわけではありませんが、その思想を絵巻の中に独自に取り込み消化しようとしています。

最後に、中世後期の文学的創作が主に男性によって行われていたと言うならば、女性作家にとっては、書くという行為そのものが男性を装うことでした。この観点からすると、最後の場面でも、ジェンターの区別に疑問が付され、外見と中身の齟齬が表明されていることは、まさに女性作家が直面していたような問題に通じるように思われます。女性が文学的表現を生み出すことに対して、独特な文化的規制があったことを考えると、画中詞は、女性作家がその社会的立場への交錯する思いを表現する、密やかな場となっていたと考えられます。絵と画中詞は一体となって、力をもつて立ちはだかる文化に対して、ささやかにしかし巧妙に異議を唱える場を提供していたのです。

このような機会を与えてくださり、本当にありがとうございます。白描絵巻の研究のますますの発展と今後の共同研究を楽しみにしています。

——絵に描かれた要素一つ一つを丁寧に分析することで、これほど多くの情報を読み取ることができるのですね。改めて、『新蔵人』絵巻と女性との関係を考えていくことの重要性を痛感いたしました。マコーミックさん、本日は大変示唆に富んだお話をありがとうございました。  
(於名古屋大学比較人文学研究室 2014.6.13)

【注】

- (1) 「源氏の間を覗く——白描源氏物語絵巻と女房の視座」『描かれた源氏物語』翰林書房、二〇〇六年)。
- (2) "Mountains, Magic, and Mothers: Envisioning the Female Ascetic in a Medieval Chigo Tale." in *Crossing the Sea: Essays on East Asian Art in Honor of Professor Yoshida Shimizu*. Edited by Gregory P.A. Levine, Andrew M. Wasky, and Jennifer Weisenfeld. Princeton: Tang Center for East Asian Art, in association with Princeton University Press, 2012.
- (3) アメリカ人漫画家のアリソン・ベクデルによって考案され、創作物(フィクション作品)、特に映画が「女性に優しい」かどうかを判断するものとして有名になった。判断基準となっているのは以下の三点：①(名前の与えられた)女性が最低限二人登場する、②その女性たちがお互いに会話をする、③その会話の内容は、男性以外についてである。
- (4) 本書Ⅲ「絵巻の筆者」(江口啓子)参照。これらの女性たちの生没年は、ほとんどの場合が未詳である。
- (5) 本書Ⅳ4「『新蔵人』絵巻と絵を描く女房」(阿部泰郎)参照。
- (6) 佐野みどり「『しぐれ絵巻』」『国華』一三三三(二一・一六)、二〇〇六年一月、徳田和夫「お伽草子『しぐれ』永正十年絵巻の紹介と翻刻」『魅力の奈良絵本・絵巻』三弥井書店、二〇〇六年)。

- (7) 佐野みどり「王朝の美意識 一〇」『書苑案内』七二、一九九一年一〇月。注文主と女性鑑賞者の問題については、池田忍『日本絵画の女性像―ジェンダー美術史の視点から』第三章「女性像と女の鑑賞者」(筑摩書房、一九九八年)。
- (8) 江口啓子「『新蔵人物語』解題」(名古屋大学比較人文学年報別冊二〇〇五年『新蔵人物語』絵巻の研究) 名古屋大学文学研究科比較人文学研究室、二〇〇六年三月。また、本書IV 1「『新蔵人物語』絵巻冒頭部の仕掛け」(玉田沙織) 参照。
- (9) 伊東祐子『藤の衣物語絵巻(遊女物語絵巻)―影印・翻刻・研究』(笠間書院、一九九六年)。
- (10) 成原有貴「描かれた尼姿の意味―『阿字義絵』の絵を中心とした再考察」(『学習院大学人文科学論集』一一、二〇〇二年一〇月)。(11) 注8江口論考参照。
- (12) 本書IV 3「異性装の物語としての『新蔵人』絵巻」(鹿谷祐子) 参照。
- (13) "Becoming a Woman" in Sixteenth-century Japan: Overcoming the Buddhist Paradigm of Male Transformation (Henjō nanshi 変成男子) through Text and Image," paper delivered at University of Heidelberg, 2009, University of Massachusetts, Amherst, 2009, University of Kansas, 2008, Humanities Center, Harvard University, 2007, 木村朗子「宮廷物語のクイーンな欲望」(『日本文学』六三・五、二〇一四年五月)。
- (14) 本書IV 2「『新蔵人』絵巻の結末は「めでたし」か」(江口啓子) 参照。
- (15) 亀井若菜「『信貴山縁起絵巻』の尼公の表象―女人往生のイメージ」(平安文学と隣接諸学―王朝文学と仏教・神道・陰陽道) 竹林舎、二〇〇七年)。亀井氏は、『信貴山縁起絵巻』の尼公が紫雲棚引く信貴山に向かう姿が、現し身のままの往生すなわち現身往生を表しているのではないかと論じている。
- (16) 成原有貴「平家納経見返絵に関する一考察」(『仏教芸術』二一七、一九九四年一月)、西口順子「転女成仏経」について」(『中世絵画のマトリックスII』青蘭舎、二〇一四年。初出「尼寺文書調査の成果を基盤とした日本の女性と仏教の総合研究」(大手前大学、二〇〇六年)、木村朗子「女帝の生まれるとき―『我身にたどる姫君』における往生をめぐる構想力」(『言語情報科学』二、二〇〇四年三月)、原口志津子「法華経曼荼羅と女人成仏―富山市・本法寺蔵本を中心に」(『日本の宗教とジェンダーに関する国際総合研究―尼寺調査の成果を基礎として』大手前大学、二〇〇九年)、Lori Meeks, *Hokkeji and the Reemergence of Female Monastic Orders in Premodern Japan*, University of Hawaii Press, 2010.

あしがき ● 越境に誘われる―『新蔵人』絵巻を読む

中世のテクストは、文学も宗教思想も、また美術や芸能でも、既成の学の枠組みには収まらない、境界的な、むしろ越境するテクストに満ちている。『新蔵人』絵巻は、そのひとつである。この、おそらくは最初から白描小絵として創り出された物語は、絵巻のテクスト複合のうえに、画中詞というもう一つの水準のテクストを重ねて、併せてさまざまな越境を遂げる。末娘に「心のまま」に生きよ、という父が許した蔵人としての男装の出仕は、既に内侍である中君を寵していた帝の物珍る心を揺さぶり、常ならぬ関係に立ち到る。その、世にも稀な顛末は、やがて新蔵人が尼となり、大君の尼寺へ入る出家遁世という宗教的な結びを迎えるが、そこでも予定調和を転倒させる驚くべき一言が用意されている。

岡見正雄先生に捧げられた『室町ごころ』(角川書店、一九七八年)に切畑健氏により初めて紹介された、「室町ごころ」を体現するようなこの絵巻を、何時か読もうと念じていた。幸いに同好の士に恵まれ、二〇〇三年には大学院の演習でも取り上げて、本文読解と注釈に取り組んだ。有志とサントリー美術館(この

「あなたは衣をかぶっていらつしやい！御髪がそんなだから特にそのように申すのでしようよ。そうでなくてさえ法師のようなお顔立ちで御髪の様子までそれなのだから人が「法師と同居している」とか申しているのがやるせないのよ」



大君

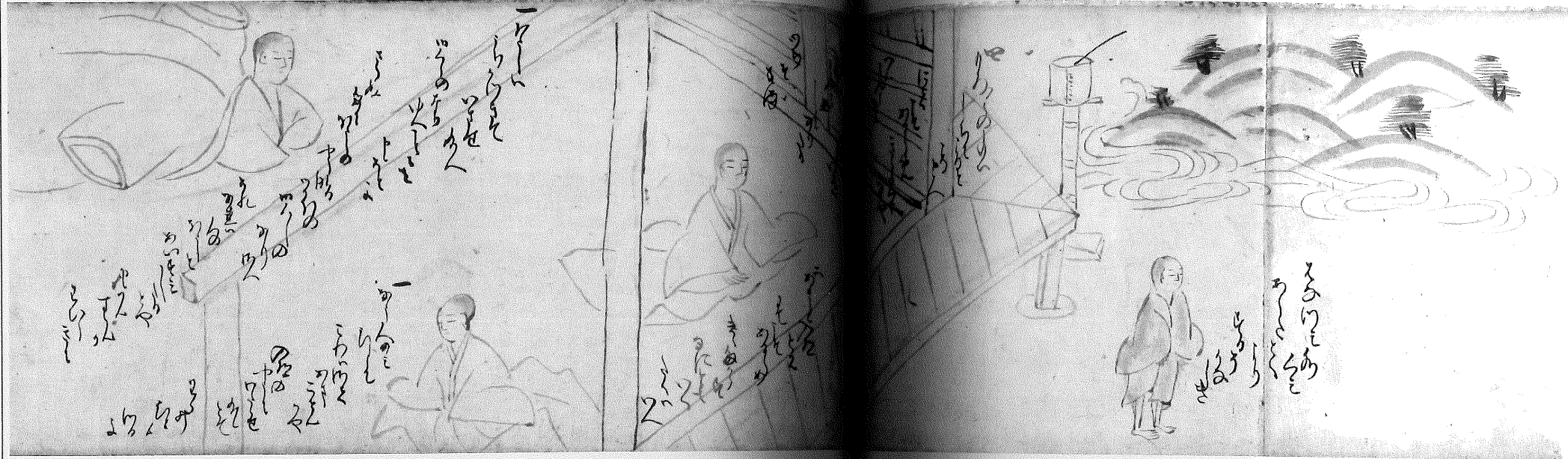
3

「あらゆることはその本質によると言つてしよう。尼と入道だつてその本質は一緒でしよくだらない！」「変成男子」とは「変成女子」に私へんじやうじは生きながらへんじやうじなつた気持ちがする



新蔵人

4



「ねえよその人が彼女を見て「これは はてさて尼御あまご前まへだろうか入道あまごのようであいらつしやる」と言つて笑つていましたよ」



尼2



新蔵人

「尼と入道とは似ているものでしょうそんなこと聞きたくもない何とでも言いたければ言えばいい！」



尼1

「花摘み 水汲みを朝早くからするの切ないわ」

ポイント

尼になった新蔵人が画面の中心に描かれています。詞書では仏道修行の末に成仏した事になっていますが、絵の中の様子を見ると、そう一筋縄ひとしなわでいったわけではないようです。この詞書世界との落差が画中詞の特徴であり、物語に豊かさを与えています。



5 お姉さまがおっしゃるのももつともですけど、それでも「命果てるまでの間は確かにありますわ、私はその間をただ心楽しく過ごしたいの」

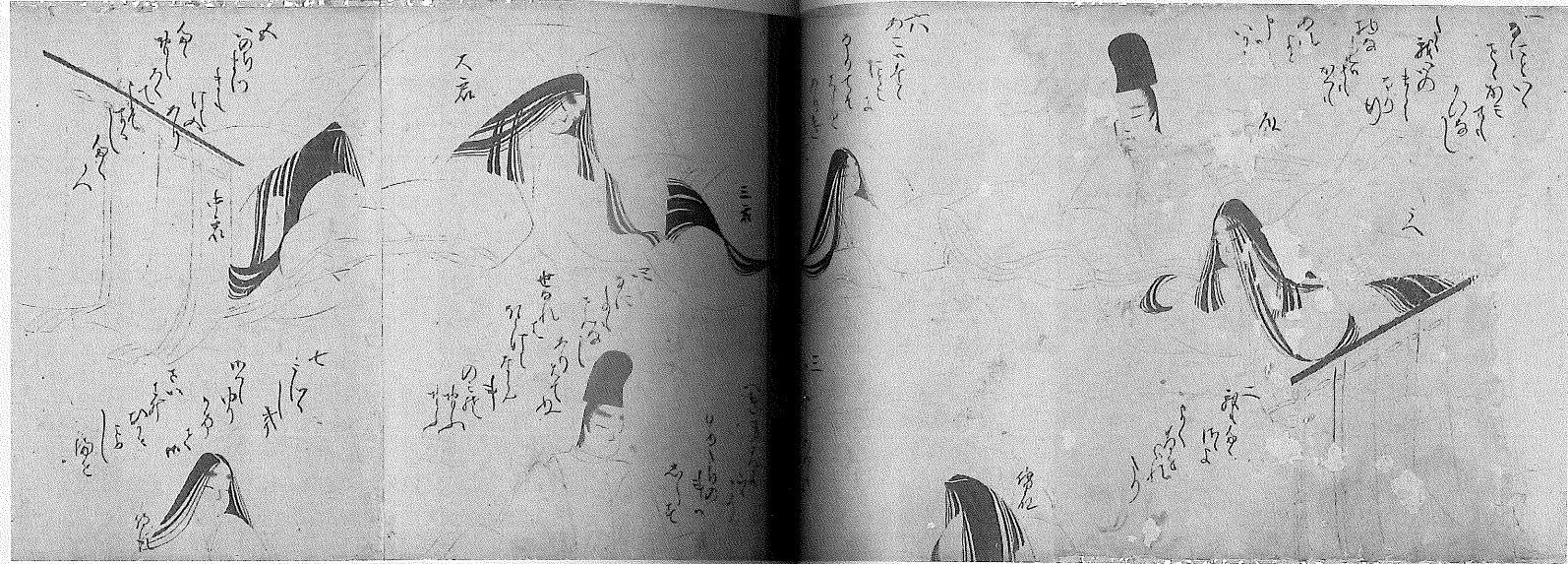


なかのきみ 中 君

4 あれこれ考えたところで何事も無益ですわ「いざれ死ぬ身」なんです、私に晴れて成仏することばかりが願われますわ



おしちのみ 大 君



7 どの姫さま方も美しいその御髪で、ぐいぐい幸せをお引き寄せなさいませ



しちろのお 侍 従



くろつきのお 威 人

8 私のことは特に心配には及びませんよ、妹たちはどうなるかわかりませんけどね



くろつきのお 傳 殿



うすの 上

6 あたしは男になって走り歩きたい！



さんのみ 三 君

1 どれだけでもどいって、所詮、子どもは親の思惑など気にせず、自分の思うように生きていくものなのだから、いつか「思うように生きてよ」と言ってるのは、どうだろう？



殿

2 私もまったくそのように存じますわ、よくぞおっしゃいました

ポイント  
画面の中心に描かれているのは三君。この物語の主人公であることを視覚的にアピールしています。父親を正面から見据え⑥「あたしは男になって走り歩きたい」と宣言している姿は三君のキャラクターをよく示すとともに強烈なインパクトを放っています。

# 室町時代の 少女革命

しんくろうど

『新成人』絵巻の世界

阿部泰郎【監修】

江口啓子

鹿谷祐子【編】

玉田沙織

笠間書院

## 室町時代の少女革命

『新蔵人』絵巻の世界

監修者

阿部泰郎 (あべ・やすろう)

名古屋大学大学院文学研究科付属人類文化遺産テキスト学研究センター教授。  
名古屋大学大学院文学研究科付属人類文化遺産テキスト学研究センター教授。  
著書に『湯屋の皇后』(名古屋大学出版会、1998年)、『聖者の推参』(名古屋大学出版会、2001年)、  
『中世日本の宗教テキスト体系』(名古屋大学出版会、2013年)など。

編者

江口啓子 (えぐち・けいこ)

名古屋大学大学院博士課程後期在籍、名古屋市中立中央高等学校教諭。  
『名古屋大学比較人文学研究年報別冊『新蔵人物語』絵巻の研究』  
(共著、名古屋大学文学研究科・比較人文学研究室、2006年)。

鹿谷祐子 (しかたに・ゆうこ)

名古屋大学大学院博士課程後期在籍、愛知教育大学非常勤講師。  
論文に「お伽草子『ちごいま』の柏木物語受容」  
(『名古屋大学国語国文学』106号、名古屋大学国語国文学会、2013年)、  
『我が身にたどる姫君』一品宮と不婚内親王立后」  
(『古代文学研究第二次』古代文学研究会、2013年)。

玉田沙織 (たまだ・さおり)

名古屋学院大学講師。  
論文に“Formation of a Commentary in Nineteenth Century Japan:  
Motoori Scholar Nakayama Umashi's Approach to *Gosen Wakashū*”  
*HERSETEC* 4:1 (Graduate School of Letters, Nagoya University, 2011)、  
「風吹けば」詠の語り—『大和物語』第百四十九段論—  
(『名古屋大学国語国文学』104号、名古屋大学国語国文学会、2011年)。

2014 (平成 26) 年 10 月 20 日 初版第一刷発行

発行者 池田圭子

装丁 笠間書院装丁室

発行所

笠間書院

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町 2-2-3

電話 03-3295-1331 Fax 03-3294-0996

振替 00110-1-56002

ISBN978-4-305-70745-1 C0093

モリモト印刷・製本  
乱丁・落丁本はお取り替えいたします。  
<http://kasamashoin.jp/>

若菜氏と玉田沙織が担当した。これにより、本書は単なる注解をこえて、『新蔵人』の物語絵、白描小絵としての真価と達成を、より鮮やかに読者に伝えられるだろう。ご多忙のなかで参加していただいたマコーミック氏に、心より感謝を申し上げます。

この本が出版される予定の十月には、上島亨氏と阿部龍一氏が主催するハーバード大学における宗教遺産学の研究集会に伴って行われる、マコーミック氏による物語絵のワークショップにおいて、本書のレビューが行われ、共著者たちが参加して『新蔵人』や『ちごいま』を巡る日米の若手研究者の交流が企画されている。この一冊を基点として、いかなる可能性が拓かれるか、実に楽しみである。

最後に、この『新蔵人』絵巻の調査をお許しください。写真を提供していただき、本書への掲載をお許しいただいた、サントリー美術館と大阪市立美術館、それぞれの学芸員・担当者の方々に、学恩を謝すると共に深く御礼を申し上げます。また、この過程でご助成とご指導を蒙った多くの方々と、研究に参加していただいた方にも謝意を呈するところである。

本書は、日本学術振興会の科学研究費補助金 基盤研究(S)「宗教テキスト遺産の探査と総合的研究—人文学アーカイヴス・ネットワークの構築—」(課題番号 26220401、研究代表者・阿部泰郎)の研究成果である。

二〇一四年九月

阿部泰郎